

曇鸞教学の背景に関する一考察

福 井 智 行

曇鸞教学の背景を考える場合、北魏社会に於いて仏教がどのように受容されていたかということと、仏教が儒教・道教とどのように関わっていたかを考慮した上で考察していかなければならないであろう。北魏（398～534）は北朝を統一して以来、中国の封建制度を中心に漢化政策を行っていき、その漢化政策中で儒家思想が振興していった。また当時の皇帝達により支持され仏教も道教も盛んな時代であり、概して言えば北魏を含めて南北朝時代というのは、儒教・仏教・道教が互いに争い、そして吸収し融合していく時代でもあったらしい¹⁾。このような状況下で、仏教、特に曇鸞が大成したといわれる中国浄土教は、北魏の民衆にどのように受け入れられたのだろうか。曇鸞以前において阿弥陀仏（無量寿仏）信仰は、その名ゆえに道教的な不老長寿を説く神仙的なものとして民衆に受け入れられ、盛んに信仰されていたようだ²⁾。このような民衆の誤解を正し、中国浄土教を大成していったのが曇鸞であろう。この事に関して、曇鸞（467～542）著の『往生論註』、唐の道宣の『統高僧伝』と迦才の『浄土論』等の中より窺ってみたい。

唐の道宣の『統高僧伝』巻六（『大正新修大蔵経』50巻470頁）には、「曇鸞は五台山の麓で生まれ、靈山五台山の神秘的な雰囲気、心神歓悦して五台山に於いて出家し、出家後に、四論や仏性を学び、『大集経』の注解をしていたが、病氣（氣疾）を患い途中で筆を止めている。この「氣疾」を治すために、いろいろと治療を試したようであるが、中々治らず、この為曇鸞は、『大集経』の注解の為にも、病氣にかからぬ様、不老長寿を求めて道教に足を突っ込んでいく。当時河北にまでその名が轟いていた江南の道士・陶弘景を尋ねて、不老不死の法を受ける。この不老不死の法である「仙經」十巻を持って帰る途中、都洛陽でインド僧の菩提流支にあい、仏教には仙經に比べ物にならないほど永遠のいのちを説く尊い經典があることを諭され、『観無量寿経』を渡され、仙經を焼き捨てて浄土に帰入した」と伝えられている。この伝をそのまま鵜呑みにすることはできないが、曇鸞が出家後に一時的にせよ道教と深く関わっていたことがわかる。それでは曇鸞が、

浄土教帰入後に道教の思想を如何に依用或いは廃捨したのかの一端を考察してみたい。

『論註』（菩提流支訳の『浄土論』の注釈書）をみると、多々道教的と思われる箇所がある。まず『論註』上巻から見ていくと、八番問答中の第六問答在縁釈（『浄土真宗聖典』七祖篇 110～111 頁）下には、毒箭と滅除葉の譬を出して、毒箭が中って筋を切り、骨を砕いても、滅除葉を塗った鼓の音を聞けば、毒箭は抜け、毒も除かれるように、五逆十惡の者も、十念の念仏によって、浄土に往生することが可能であること例証している。更に『論註』下巻をみていくと、上に述べた譬の名号を更に具体的に道教的に解釈している箇所があるので合わせてみておく。それは下巻、起觀生信章の名即法（『浄土真宗聖典』七祖篇 117～118 頁）と説くところで、諸仏菩薩の名号が名即法であることは、陀羅尼・禁呪と同様であると示し、その直後に「日出東方乍赤乍黄」と唱えたと腫れ物が引くとか、「臨兵闘者皆陣列（在）前行」を誦すると敵の武器が中らないとか、筋を違えたとき、木瓜の名を呼んだら治るとか、いかにも道教的な（ここに出てくる『抱朴子』は東晋の神仙家・葛洪 [238-343] の著で、神仙術を論ずるものである。）禁呪を出して、この禁呪のように弥陀の名号も名が法に即したものであり、ここでも仏名を称すれば、衆生の無明の闇を破り、志願を満足させる力用が存することを例証する。この 2 つの譬を見ていくとどちらも縁起の理法を説く仏教的な譬ではなく、どちらかという民間信仰的、特に名即法の譬は直接「抱朴子」の名前を挙げているので、道教的なものといえよう。この 2 つの譬は、確かに十念の念仏の功德・力用とをわかりやすく説いているが、反面、念仏を呪術的な文句と勘違いされ得る可能性をはらんだ譬といえる。ここで少し、この譬にある「陀羅尼（呪）」と「念仏」の共通点と相違点を考察してみる。まず「陀羅尼」の義を定義しておく。「陀羅尼」とは、『秘蔵記』（『大正新修大蔵經』・図像部 1・5 頁 b）を参照すると、陀羅尼に関して 5 つ示されており、その中の第 3 番目に出されている「呪」の義が今回の「陀羅尼」の意味に相当するであろう。それは「呪者、仏法未來漢地前有所聞呪禁法。能發神驗除災患。今持此陀羅尼人能發神通除災患。与呪禁法相似。是故曰呪。」で、民間的な禁呪のように神驗を發して災患を除くものとされている³⁾。これを踏まえて「念仏」と「陀羅尼（呪）」との共通点を窺うと、それは双方とも人間の能力を超えた力を抛り所にし、何らかの結果や効果を得ようとする点であろう。相違点として言えるのは、一つは「呪」が世俗的な要求であるのに対し、「念仏」は阿弥陀仏の本願力をもって浄土往生し涅槃を得ようとする出世間の行である点であり、二つは「信」

という点である。すなわち、「呪」や「陀羅尼」は、その功德を信じる側が無条件にそして盲目的に信じてしまう嫌いがある。これに対し「念仏」に関して曇鸞は、三不三信の釈を示し、「念仏(名号)」とは淳心・一心・相続心の三信にかなった称名であり、盲目的な信による称名ではなく、如実修行相應の称名であると説く。これらを考慮すると、曇鸞においても「念仏」と「陀羅尼(呪)」とは別のものとして捉えていたといえよう。それでも名即法の譬の最後に「吾身得其効也。如斯近事世間共知、況不可思議境界者乎。滅除業塗鼓之喻、復是一事。」と記し、この譬における自らの経験とこの譬の世間一般への流布(吉田隆英氏の論文「禁呪と木瓜」によると、ここに出される「日出東方乍赤乍黄」や「臨兵闘者皆陣列(在)前行」という禁呪は、曇鸞が勝手に例として創作したものではなく、当時の中国では一般的に知られた民間療法のようなものであったらしい)を述べたのは、当時一般的に知られていたであろう道教的な譬や禁呪を用いることによって、曇鸞は民衆教化という立場に立ち、弥陀の名号に力用を示そうと試みたであろうと推測される。また、迦才の『浄土論』下巻を参照すると、「即半夜内。發遣使者。遍告諸村白衣弟子。及寺内出家弟子。可三百余人。一時雨雲集。法師沐浴著新淨衣。手執香炉。正面西坐。教誡門徒。索西方業。日初出時。大衆齊声。念彌陀佛。便即寿終。(中略)法師和上。一生教人修淨土業。(『大正新修大藏經』47卷97頁)」とあり、曇鸞の教化により、念仏が広く浸透していたことが窺える。

以上、この『統高僧伝』の「曇鸞伝」に於ける信憑性(特に、曇鸞の浄土教への帰入に関するもの②)にも多少の問題が残る直ぐに首肯できるものではないが、『統高僧伝』を見る限りにおいて、曇鸞が一時的にせよ、道教に身を置いており、その後浄土教へと帰入していったことが知られた。ところが『論註』を窺う限りにおいて曇鸞は、浄土教に帰入後も、単に道教を捨て去れるのではなく、当時の民衆の中で道教が盛んであった状況を鑑みて、念仏の力用を示す為に道教的な譬を巧みに利用し、衆生教化の面として、阿弥陀信仰を神仙的なものと誤解している民衆を道教の教えより、更に高度な教えであり、救いの教である阿弥陀仏の浄土へ誘引せしめようとしたのではなかろうか。

-
- 1) 任繼愈編「定本 中国仏教史Ⅲ」を参照
 - 2) 藤堂恭俊著「無量寿經論註の研究」を参照
 - 3) 村上速水著「親鸞教義の研究」を参照

〈キーワード〉 念仏, 呪, 『統高僧伝』

(龍谷大学大学院)